

春日部福音自由教会 2020年9月27日 11:00 中央会堂礼拝（同時配信）

聖書 新約聖書 マルコの福音書 9章 1節～13節

説教 「輝きに驚く」 小野信一牧師

I. 序

おはようございます。9月の最後の日曜日となりました。この間までとても暑い日々でしたが、少し過ぎしやすくなったかなと思ったら、急に冷えてきたような感じがいたします。お互い身体に気をつけて過ごしましょう。

今日はマルコの福音書の9章1節から13節までを朗読していただきました。先週の説教は9章1節から8節でしたが、聖書の本文テキストからしますと少し脇筋と言ったらいいのでしょうか、たすきをつなぐ「神の国実現のためのリレー」の話が主になりました。今日はもう一度この箇所を取り上げて本筋の話として「主イエスが輝かれたこと」、「主イエスの輝きに弟子たちが驚いたこと」に焦点を当てたいと思います。もう一度お祈りをささげましょう。

天の父なる神様。今私たちはあなたの御前に出てこの礼拝堂において、またそれぞれの今いる場所、それぞれの家において礼拝をささげております。神様、あなたの前に出て礼拝をささげます。あなたの前にいることがどういうことであるのか、今日、主イエス様の輝きについて伝えられている御言葉を通して、私たちに少しでも教えてくださり、また見せ、感じさせてくださいますように。聖書に文字によって書かれていることを通して、御霊が私たちに光を当て、目で見ることのできない主イエス様のお姿を見させ、この耳に聞くことのできない神の声を聞かせてくださいますように。主イエスキリストの御名によってお祈りします。アーメン。

II. 黙想の4つの段階

数年前に京都で『黙想のセミナー』を行ないました。日本文化宣教協力会によって「京都セミナー 黙想を学ぶ」というセミナーが開かれ、様々な学びの機会となりました。その一つでカトリック教会を訪れて溝部司教のお話を聞く機会がありました。その時に「聖書の黙想について」教えていただきました。その時は「四つの段階で黙想をする」ということを教えていただきました。ちょっとそれを紹介したいと思います。

まず一つ目は「考える」って事ですね。聖書を読んで「これはどういう場面だろうか」「いつ、どこで、誰が何を言ったか」「どんなことが起こったか」「考える」ということです。

二つ目は「想像する」。その場면을想像して、「どんな明るさだったか」「どんな気温だったか」「どんな色だったか」、その空気を想像する、その出来事を想像するということですね。

三つ目が、「対話」と言われていました。「お話ししてみる」というのです。聖書に出てくる人物と対話をする、つまりインタビューしてみる。これも想像ですけれども、想像の中で会話をして、例えば今日の箇所であれば、「ペテロさん、その時いったいどんな様子だったのですか？」って質問をしてみる。そして思い巡らしの中で会話をする、ということでした。それが三つ目の段階。

そして最後の四つ目の段階は、「それではどう生きるかを考えて、小さな決心をする」というものでした。

『聖書を読み聞いた者として、様々に思いめぐらし黙想し（その中には想像や対話が含まれます）その上で、み言葉を聞いた者として、どう生きるか、どう行動するか、小さな決心をしてみましょう』、そういうことを教えてくださいました。小さな決心を積み重ねてそれを実際にやってみる。

『できたかできなかったか、できてもできなくてもやってみる。それを積み重ねていく人が、大きな決心をすることができるようになります』というお話をしてくださり、『その大きな決心とは人生に関わる結婚の決断とか、仕事を選ぶこととか、また殉教に向かう心を決める』ということについてもお話をしてくださりました。

Ⅲ. ペテロに尋ねてみる

今日は私も少し、この箇所を読んでここに出てくる人たちにインタビューしてみよう、と改めて黙想してみました。

まずペテロがいます。ヤコブもいますしヨハネもいます。「その3人の弟子たちに尋ねてみたいな」「それからモーセさんとエリヤさんもその場に現れたので、彼らにも聞いてみたいな」と思いました。色々想像上で対話をしてみたところ、色々な質問が出てきて、色々な答えが返ってきたように思います。ただそれを全部ここで話しすることはできませんので、少しそれを紹介しつつ、この場面をもう一度たどっていきたいと思います。

まずペテロさんに尋ねてみようと思いました。「どんな様子だったのですか?」「その時どんな色でしたか?」「どんな輝きでしたか?」想像しながら質問してみます。すると想像上の会話の中で答えが返ってくるわけです。「それにしてもあれは本当に特別な日だった。山の上でイエス様の姿が変わったのだ。いつものイエス様が突然輝き始めた。そして真っ白な衣の姿になっていた。」ペテロは驚きを語ります。実際に私も想像上でインタビューしてみましたけれども、ペテロは実際にマルコに対して、何度も何度もイエス様と過ごした時間のことを話したのでしょう。今日のこの場面もそうでしょう。ずっと言わないでおいたけれどもある時話し始めて、そして身近にいたマルコ（マルコは12弟子ではなくてもっと若い人だったと考えられていますけれども、もしかしたら最後の晩餐の用意をしたその場にいたかもしれない若い男性だったかもしれません。）に、後になっていろいろ話をして、何度も何度も聞いたことをマルコがまとめて書いた、それがこのマルコの福音書であろうという風に言われています。マルコはそれをこうやって、今私たちが日本語で読めるような形になっていますが、書き残してくれました。

「イエス様のお姿が突然変わったのだ。輝き始めて真っ白な衣の姿になっていた。とても驚いて何が何だかわからなくなっていた。」「ペテロさん、その時どんな気持ちだったのですか?」と尋ねてみたくなります。もし皆さんがペテロに気持ちを尋ねたら、どんな答えが返ってくると思うでしょう。皆さんもそのようにですね、聖書を読みながら想像し、そして聖書の中の人たちと会話をしてみるということをしてみたいと思います。

ペテロはこういう風に言ったかもしれません。「もう何が何だかわからなかった。あまりにも凄すぎて、明るすぎて、何が何だかわからない、すごい場面に居合わせているんだなと思った。何が起こったか、なんとそこに現れたんだよ。誰だと思う?モーセとエリヤだよ。あれには驚いた。本当に特別な日だった。すごいことだった。俺たちは山の上でモーセとエリヤに会ったんだ。モーセは輝いていた、エリヤも輝いていた、でもそ

の二人よりもイエス様ももっと輝いているんだ。イエス様ってすごい方だ！そう改めて思ったよね。イエス様、あなたは本当は誰なんですか？って何度も思ったことだけれど、あのガリラヤの湖の嵐がなぎに変わってしまったあの瞬間、みんなが思わず『この人は誰なんだ』と声を揃えた時以来、何度も思ったけど、あの日あの山の上で改めて、イエス様、あなたは本当は誰なんですか？って言わずにはいられなかった。声にはならなかったから心の中で叫んだだけなんだけど。」そんな答えが返ってくるように思いました。

「そこにはモーセがいたんだ。エリヤがいたんだ。信じられるか？信じられないだろう。でも本当だった。俺は本当に感激した。そこにいられるのが嬉しくて誇らしくて舞い上がって、そして言ったんだ。『先生、私たちがここにいるのは素晴らしいことです。私たちが作りましょう。幕屋を三つ作ります。先生の為に一つ、モーセ先生のために一つ、そしてエリヤ先生のために一つ、どうでしょうか。』そうすれば何日も山の上に留まってこの素晴らしい光景を見ていられると思ったのかな、自分でももうよくわからない、何を言ってるのかわからずに思わず知らず言っていたんだ、幕屋を三つ作りますと。私たちがやりますと。今思うと恥ずかしいけどそのくらい嬉しくて不思議で、そして怖かった。なんという場所だろう。身体が震えてくるようで、ヤコブとヨハネと3人で顔を見合わせていた。」

「その時ヤコブとヨハネの顔を見て、どうだったのですか？」

「実は自分たちも照らされて光ってたんだ」ペテロは言います。「山の上のその辺りは照らされて全体が光って、そして自分も照らされていた。気が付いたら自分の手が輝いている。イエス様の輝きで照らされて光っている。自分の身体も、自分の顔はよく見えないけれども仲間の顔が照らされているのが見えた。ヤコブの顔が光っている。ヨハネの顔が輝いている、イエス様の輝きに照らされて輝いている！」そんなことをペテロは話したかもしれません。

IV. 輝きに照らされる

私たちも想像してみましょう。その時自分もそこにいたなら、自分の手はどうなっていたか、自分の顔はどうなっていたか、お互いの顔はどう見えたか想像してみましょう。イエス様の輝きに照らされている自分の顔、そして仲間の顔を。今ここにいるお互いの存在、自分の顔は見えませんが、でも隣の人の顔が見える。その人もイエス様の光で照らされている、輝いている。不思議な不思議な光景でした。もちろんその輝きはずっと続いたわけではない。ペテロたちの顔も普通に戻ってきました。でもその記憶は留まったのです。私たちはどんな顔しているのでしょうか。光っているのでしょうか？輝いているのでしょうか？輝いていないのでしょうか？普通の人でしょうか？私たちは普通の人です。でもイエス様によって照らされることが出来ます。

年間賛美を今日も歌いましたが、今日は2節だけを歌うことにしました。今1節ずつしか歌わないようにしています。

“御言葉受けし主の教会は 光掲げて道を照らす。波風すさぶ海原をも するべとなりて導き行く”。

「主の教会は、主に繋がる一人一人は、光を掲げて道を照らす」と歌っています。私たちは照らされて照らすのです。イエス様の光を受けて、それを反射して誰かを照らすことができる。私たちはお互いにお互いを照らすために、そうして一緒に一つとなって周りの人たちを照らすために、ここに一緒にいるのです。「モーセの顔はどんなでしたか？」「モーセさんの顔は輝いてましたよ。」ペテロは言ったのではないのでしょうか。でもそのモーセの顔よりもイエス様の顔の方が輝いていたのです。生きたまま天に帰ったエリヤ、あのエリヤ先

生よりもイエス様の方が輝いていたのです。もっと輝いている、それがイエス様なのだと改めて知った日でした。イエス様って誰なのかをさらに教えられた山の上のできごと。姿が変わったのでその山は変貌山と呼びますが、変貌山のできごとでした。

そしてペテロたちはイエス様の輝きに驚いて申し出ます。「自分でも何を言ってるかわからず思わず言ってしまったんだ。『私たちがします。私たちが作ります。幕屋を三つ作ります。』天幕を三つ立てて、そこでしばらく過ごせば良いと思ってしまったのか、そんなことをつい言ってしまった。」でもペテロはマルコに伝えたのでしょう。「実際は何を言っているかわからなかったんだ。訳が分からなかった。凄すぎて何を言ったら良いか分からなくなっていたのだ」と。ペテロたちは照らされて驚いて思わず「幕屋を三つ作ります」と言いました。これはどういうことだったのだろうか改めて考えるのですが、あまりよくわからないのですよね。幕屋を3つ作るってことに意味があるのかないのか。幕屋にしばらく住めばもっと一緒に過ごせると思ったかもしれませんが、でも、エリヤの姿、モーセの姿はやがて消えていきました。なので「自分でも何を言っているかわからなかった」とたぶんマルコに話したように、本当にすべきことを言ったのではないかもしれませんが。正しいことを言ったのではないかもしれませんが。間違ったことを自分から言い出したり、的外れなことを言ったのかもしれませんが。でもその時の思いを素直に言うペテロだったのだなということをおぼろげに思われます。そして心で思ったことを率直に、イエス様に「私たちがやります。作ります。」と自ら進んでいく思いになっていたのだなということをおぼろげに思われます。

V. 神に出会うという経験

旧約聖書のモーセの箇所を改めて読み返しましたがけれども、モーセは神様との出会いを経験した人の代表でしょう。山の上で一人で山に行き、主と会ったのですよね。そしてエリヤという人もそうです。エリヤもまた一人で山に入り、そこで神様と出会うという経験をした人でした。そのモーセとエリヤの二人が、今イエス様と共にいるのをペテロたちは見えています。

モーセの箇所、出エジプト記 31 章からのところをちょっと開きたいと思います。モーセは何度か神様と出会う経験をしていますけれども、最初は 3 章の“燃える柴”の箇所で神様と出会いますね。それから 20 章で十戒が与えられましたけれども、山の上で十戒の言葉を受け取るっていうことがありました。その少しあと 21 章から 30 章まで色々なできごとが書かれていますけれども、31 章に 2 人の人の名前が出てきます。ベツアルエルという人とオホリアブという人。

そしてその次の 32 章には「モーセが山から降りて来ない」ということが書いてあるのです。モーセは一人で山に入り、民は麓に留まって待っていました。しかし待っても待ってもモーセが降りてきません。そこで民はモーセの兄アロンに求めます。こう言います、32 章 1 節。“さあ我々に先立っていく神々を我々のために作って欲しい。我々をエジプトの地から導き上ったあのモーセという者がどうなったのかわからないからだ。”と言います。「我々をエジプトの地から導き上ったあのモーセという者が降りてこない、どうなったのかわからない、だから我々に先立つ神を作って欲しいのだ」と言います。そして妻たちや娘たちの耳についていた耳輪とか飾り物の金を集めて、それを火に入れて型を作ったわけですが、火に入れて鋳物の子牛を作りました。そして言います。“イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から導き上ったあなたの神々だ”。“この金の子牛があなた達の神様で、あなたたちを導いてくれたのだ”という風に言うのですよね。

ちょっとここで立ち止まってひとつの質問について考えてみたいと思います。“イスラエルの民をここまで導いたのは誰だったのでしょうか？エジプトの地、奴隷の地からここまでイスラエルの民を導いてきたのは誰だったのか？”この 32 章には二つのことが出てきました。民は言いました。「モーセが導いてきたのだ、モーセがエジプトの地から私たちをここまで連れてきた」という風に言いましたね。もう一つは 4 節と 8 節で「これがあなたをエジプトの地から導き上ったあなたの神々だ」と言って、金の子牛が神なのだっていう風に言ったわけですね。でも本当はどうだったのでしょうか。神様ご自身が言っておられます。出エジプト記の 20 章の 2 節から十戒が始まりますけれど、その十戒の前の言葉、十戒の前文と言っても良いでしょう。こういう言葉です。「わたしはあなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である」。「エジプトの地から、奴隷の地から、奴隷状態のあなた達を解放したのは、導いてきたのはわたしだ」と神様は言っておられます。神様が導いた。でも民は、人々は、「モーセが連れてきた」とか「神々が連れてきてくれたのだ」と勝手に言いたくなるわけです。私たちも、これはもう一度心に留めなければならないことだと思います。私たちをここまで導いてくださったのは誰だったか。それは主ご自身であったということです。

32 章で金の子牛が作られるという大事件が起きます。大きな過ちが起きます。そして痛ましいことに民のうちの 3000 人が倒れる、主が民を打たれる、というできごとがあって、イスラエル人たちは自分の兄弟、自分の友、自分の隣人を殺せという命令を行わなければならない、という痛ましいできごとが起こりました。

33 章に雲の柱のことが出てきます。そして 14 節には「わたしの臨在」という言葉があります。あなたの臨在、神様の臨在がそこに共にある。神様がそこに臨みそこに存在してそこにおられる。神様ご自身がそこにいて一緒に行ってくださいらないならば、という話が出てきます。そして 18 節でモーセは「どうかあなたの栄光を私に見せてください」と願います。神様も言われます。22 節。“わたしの栄光が通り過ぎる時 あなたはわたしの後ろを見る。しかし私の顔は見られない”。神様と出会うというその経験が書かれています。エリヤという人もまさに一人で山に行って四十日四十夜歩いて、神様に出会う。神様が通り過ぎるのを見る。そういう経験をした人です。

34 章に行くとも再び十の言葉を記す石の板を持って、モーセは山に行きます。朝シナイ山に登って、その山の頂で「わたしの前に立て」と神様に言われて山に行き、四十日四十夜、山の上で主とともにいました。神様と共に過ごす。それがモーセの経験でした。エリヤもそれをした人でした。

私たちはそれがどういうことなのか、多分わかっていないのだろうと思います。変貌山の山の上でイエス様の姿が変わっておられた。そこにモーセとエリヤがいた。ペテロたちがそれを見た。私たちはその弟子たちの体験を追体験するようにその姿を見て、その声を聞いて、その匂いを嗅ぐというのでしょうか、そこにいるかのように経験したいと思います。でも、やっぱりよくわからない。想像を越えていて、言葉にならなくて、凄すぎてわからないのです。私たち自身が神様の前に一人で立つ、というモーセのような経験をしたことがないということなのだと思います。民は下で待っていたのです。モーセは神様と出会いました。イエス様はその特別な場所に、神様と共にモーセとエリヤと 3 人で話をするその特別な場所に、弟子たちを連れて行ってそれを見せようとされました。私たちもそれを少しでも感じたいと思います。イエス様の輝きはどんなに凄かったかわからないのですが、感じたいと思うのです。

VI. 進んでささげる心ある人

35章にもう一度、ベツアルエルとオホリアブという二人の人の名前が出てきます。ここに“進んでささげる心のある人に”ってという言葉が出てきます。いくつか読みたいのですが、出エジプト記 35章 5節。ペテロが思わず「幕屋を三つ作ります」と言ったのですけれども、それは思わず自分から進んで「私はこれをしたい」「私たちはこれを作ります」と言ったのだらうなと思います。

出エジプト記 35章は幕屋を作る、そして契約の箱を作る、色々な礼拝の道具や衣装を作る、そういう話です。35章 5節、“全て進んでささげる心のある人に 主への奉納物を持って来させなさい”。進んでささげる心のある人が持ってくる金や銀、青銅、布、毛皮、糸、油、宝石などなどです。そして10節、“心に知恵ある者はみな来て、主が命じられたものを作らなければならない”。幕屋、木材を使って金属を使って部品を作り組み立てていく、祭壇を作る、などなどです。21節、“心を動かされた者、霊に促しを受けた者”。22節“進んでささげる心のある者”と続きます。礼拝の場所を作るために進んでささげる心のある人たちがいました。そして知恵を与えられた人たちがいました。25節 26節には「心に知恵ある女」とか、「心を動かされ知恵を用いたと思った女たちは」という風に書いてあります。その知恵というのは設計する力、デザインする力のことでした。32節に“細工に意匠を凝らして”と書いてあります。そして35節には“あらゆる仕事と巧みな設計を成す者として”と書かれています。また“人を教える力をお与えになった”とも書かれています。デザインをして、設計をして、人を教えて、そしてひとつひとつのものを作り上げていくための知恵を与えられた人たちがいたということです。そしてデザインができる人はデザインをし、設計をし、金を持っている人は金を持ってきて、布を織ることができる人は織り、糸や布を持ってきて紡いだり、それぞれが知恵を用いて行なったと書いてあります。

ペテロが「私たちが幕屋を作ります」と言ったことは的外れだったかもしれませんが。けれども「心から進んでほしい。ここにいることは素晴らしいことです。私たちにさせてください」という思いを率直にイエス様に話すことができた人でした。

VII. いま見えていないものを見て歩む

さて雲の中で3人の弟子たちは神様の声を聞きます。マルコ福音書9章に戻りましょう。7節で雲の中から声がします。“これはわたしの愛する子、彼の言うことを聞け”。これは誰に向けられた声だったのでしょうか。イエス様に向けられたのではなかったですね。モーセとエリヤに向けられたのでもありませんでした。ペテロとヤコブとヨハネに向けて声がしたのです。父なる神様ご自身の声です。3人はそれを聞いたのです。それはすごいことでした。その声は消えていきました。そして見回すと雲が消えていきモーセとエリヤも見えなくなり、イエス様しか見えなくなっていた。おそらくイエス様の輝きもだんだん消えていって普通の姿に戻ったのでしょう。でも彼らはそのことを心に留めました。9節から山を降りながらの会話のことが書いてあります。「今見たことを、人の子がよみがえる時までは言うな」と言われたのですね。彼らは「この言葉を胸に納めておいた。」そして「死人の中からよみがえるとはどういうことかと互いに話し合った」という風に書いてあります。

“あの日見たあれは特別な日だった、すごいものを見たのだ”と彼らは思っているのですけれども、それはずっと見えていたわけではありませんでした。その輝きは消えていきました。でも見えないものを見ながら、彼らは歩いていきました。新聖歌の282番に、今日は歌いませんけれども、“見ゆるところによらずして”とい

う歌があります、ペテロたちの目には、いつもいつもイエス様の輝きが見えていたわけではありませんでした。その後は普通の姿しか見えない。私たちもそうです。イエス様のあの白く輝く姿をもし見たら、もっと毎日感激して感動して私たちは生きるでしょう。でもそうではないですよ。見ませんでした。でも見えるところによって歩むのではないのです。「見えていない隠された本当の神様の輝き、イエス様の輝きを見た者として、いま見えていないものを見て歩むのだ」というのがペテロたちの想いだったでしょう。

私たちも今見えないイエス様の栄光を、心の目で見る者として歩んでいきたいと思います。モーセの顔は山を下りた後、輝いていました。顔に覆いをして隠すほどでした。でも、そのモーセよりもイエス様の方がずっと輝いていたのです。私たちは今見えないイエス様の栄光を心の目で見て歩みます。私たちも照らされていた。今は見えませんが、でもペテロたちが一瞬見た、垣間見た、そしていつか将来またもう一度見ることになるあの輝きを、心の目で見て照らされたいと思います。

そして驚いていきたいと思います。そして思わず自ら進んで、「私がします。私たちが作ります」と言うような者でもありたいと思います。ペテロは的外れで間違っていたかもしれないけれども、「私たちがします」ということを心のままにイエス様に率直に話しました。

皆さんならどうでしょう。皆さんがもしあの白い、ただの白ではないあの光の輝きに照らされたならどう思ったでしょうか。どんな気持ちになったでしょうか。想像してみましょう。そしてもし自分がそこで照らされて、すごく嬉しくなって誇らしくなって、でも怖くなって、その時何を言うでしょうか。ペテロは言いました。「私たちが作ります、私たちがします」と。私たちがしたら何を言うでしょうか。何を作りますと言いたくなるでしょう。想像してみましょう。

私もいくつかのことを考えてみて、思ったことを何でもイエス様に言って良いならば、何て言いたいか考えて、イエス様とお話してみました。「今の時代、新しい時代の伝道が必要です。そして弟子を育てていくことです。弟子として育てていくこと。そして信仰の継承、この三つの事がこれからできるように願いたいです」という思いもありました。

さらに自分の心の想いの中に起こってきたことは、「この中央会堂のこの場所に新しい礼拝堂を作りたいです、作らせてください、私たちがします私たちが作りますと言いたいです」という思いでした。三つの幕屋って何なのだろうって考えて、あまりわからないのですけれども、でも“この中央会堂のこの場所にみんなの礼拝堂を正しく作っていく。そして若い世代のための礼拝堂、兼バンド部屋、兼演劇や映像のシアター、兼カフェスペースみたいな場所を作りたいです。もう一つは幼稚園、兼 ELC 英会話、兼音楽教室書道教室、兼地域の人達が来て使ってもらえるような広場のようなスペースを作りたいです”と、イエス様に言いたいなという気持ちになりました。正しいかわかりません。できるのかもよくわからない。わからないけど「イエス様、気持ちはこうです」とお話ししたってことです。率直に言いたいなと思ってイエス様にお話ししたってことです。

みなさんならどうでしょう。「イエス様、今目には見えませんが心でイエス様の輝きを今見ます。ここにいるのは素晴らしいことです。神様の声は聞こえないけれど心の耳で神様の声を聞きます。ここにいるのは素晴らしいことです。今私たちがこれを作ります。これをします。」ペテロは「三つの幕屋を」って言ったのですが、皆さんだったらどんな思いになるでしょう。率直にペテロのように素直に、心で思っていることをお話しできたらと思います。「願いはこうですけど、たぶん無理だと思います」という気持ちがあ

るならば、それを話す。でも「神様助けてください」という思いがあるならばそれを話す。そういう交わりが神様とできればと思います。神の前に出るように招かれている、呼ばれているということは、神様に照らされて自分の全てが神に見られるということです。そして自分の心の思いを、隠さずに神様にお話できるようになるということです。

彼らは垣間見た輝きが消えた後、隠されている輝きを忘れずに、やがて現れる輝きを待ち望んで生きていきました。そして復活後に、あの日のできごとを語り始めて伝えて、私たちにまで伝えてくれています。誰にも言うてはいけないと言われたのです。

旧約聖書の御言葉を二つ開きたいと思います。一つはイザヤ書 51 章です。こういう言葉です。“目を天に上げよ。また、下の地を見よ。”「天に目を上げ、下の地を見なさい」と言われています。イエス様が天に上って行かれるとき、弟子たちは空を見上げていました。イエス様を見ていたのです。そしてもう一度来られるという時を思っていました。しかしその間「地を生きていきなさい。地を見なさい。」私たちも天を見て、地を見つつ生きていきましょう。自分の人生の許された時を生きましょう。そしてもう一つ、次の世代のために祝福を用意しましょう。もうひとつの旧約聖書の御言葉はヨエル書 2 章 14 節。今日交読文で読んだ御言葉ですが、ヨエル書 2 章 14 節。“もしかすると、主が思い直してあわれみ、祝福を後に残しておいてくださるかもしれない”。後の人たちのために祝福を後に残していきたいと願います。それは「教会堂を作ります」ということかもしれないし、他のことかもしれません。「神様、イエス様、これから 40 年後 80 年後 90 年後の日本の宣教に向けて、新しい礼拝堂を作らせてください」と祈りたい、そのように願います。永遠に続くものために力を注ぎましょう。いま見えないイエス様の栄光を見て、やがてこの世が終わって新しい天と地が来る時に、イエス様の栄光を私たちは見ます。そこにつながる者として、この世で今できることを精一杯していきましょう。

VIII. 結び

お祈りをささげたいと思います。

神様、あなたの前に出て照らされることができるよう、驚くことができるように、イエス様の輝く姿を私たちの心の目に見せてください。そして私たちにできることをさせてください、という率直な思いをイエス様にお話することができますように。次の世代のために、次の次の世代のために、祝福の基となるような私たち自身になれるように。私たちにできることをして次の世代に贈り物をし、祝福を用意して喜んで与えることができますように。この国において日本人の言葉で日本人の心で祈りをささげ、互いを愛し隣人を愛して手を差し伸べる心とその形、やり方をお与えくださいます様に。ペテロのように率直にイエス様に話す者とならせてください。神様、あなたの前に立つことができますように。若い人たちを励ませるように、力づけられるように助けてください。御心ならばこの場所に新しい礼拝堂を作り、おささげすることができるように力を与えてください。必要なすべてを備え、お与えください。あなたと共に、あなたの御心であるならば願うことの全てを成し遂げることができますように。あなたの栄光を仰がせてください。

主イエスキリストの御名によってお祈りします。アーメン。